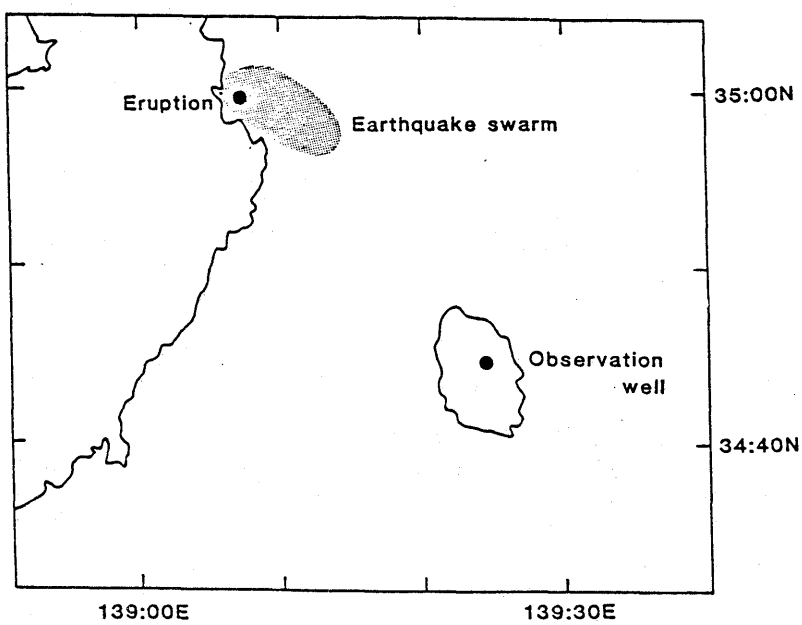
伊豆半島東方沖海底噴火後の伊豆大島火山噴気温度変化*

東京大学理学部地殻化学実験施設

東京大学理学部では，伊豆大島火山1986年の噴火前から，中央火口の北北東約3kmのカルデラ床に掘削された井戸から放出している蒸気の温度を深さ150m位置で観測している[1]。1989年6月から始まった伊豆半島東方沖の群発地震－火山活動に対応して温度変化が認められたことをすでに報告したが[2]，本報告では，1989年8月以降の変化を報告する。

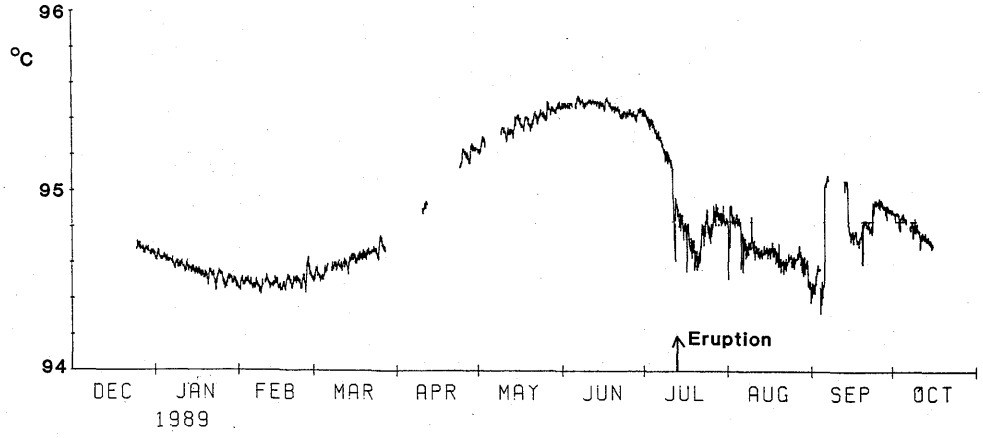
第1図に伊豆半島沖の群発地震，噴火地点と観測地点との位置関係を，第2図に1989年10月までの



第1図　観測地点
Fig. 1　Locality of observation site.

蒸気温度変化を示す。噴火前に急激に低下した蒸気温度は，噴火後は振幅の大きい温度変化を示しつつ推移した。9月に入ると一時的な温度上昇，下降など不安定な変化を示していたが，9月末から小さい振幅の変化に移行し，緩やかな温度低下を示している。振幅の大きさは噴火前と同程度であり，通常の年周変化のトレンドにもどったようにも見える。このことは，今回の火山活動が沈静化したことと対応しているのであろう。

*　Received Jan. 8 ,1990



第２図　伊豆大島火山カルデラ内蒸気井から噴出する蒸気の深さ150m位置での温度変化
（1988年12月－1989年10月）

Fig. 2　Temporal variation in temperature of fumarolic gas emitted from a steam well in the caldera of Izu-Oshima volcano (Dec.1988－Oct.1989).

参考文献

1）　東京大学理学部地殻化学実験施設（1988）：伊豆大島火山における地球化学観測．火山噴火予知連絡会会報，40，67－69.

2）　東京大学理学部地殻化学実験施設（1989）：伊豆半島東方沖海底噴火の前に変化した伊豆大島火山噴気温度．火山噴火予知連絡会会報，44，116－117